

平成28年度 教育論文（道德教育）

いのち輝き、自他を『つなぐ』 道德教育を目指して

～体験活動を道德の授業に生かす取組～



御船町立御船小学校

は じ め に

今年、年度初めに大きな二度の地震が発生しました。「熊本地震」と命名されたこの地震は、未曾有の大地震となり今なお余震が続いています。震災直後、避難所・物資の集配所となった本校の体育館では、寝ずに避難所を切り盛りする役場の方々、警察や消防の方々、全国から集まったボランティアの皆さんをはじめ、多くの人々が被災者のために行動して下さいました。そのような中、大人に混じって自ら行動する子供たちがいました。水汲みや炊き出しの手伝い、トイレ掃除やお年寄りへの声かけ等々、自分にできることを始めていた子供たちを見て、感動と感謝の気持ちでいっぱいになりました。これまで経験したことのない苦難や恐怖を抱える中、人と人が繋がることの大切さや、人とのご縁の中で「思いやりや優しさ」に触れることができたことは、私自身にとっても貴重な体験であり、あらためて子どもたちから「行動する」ことの大切さを学びました。

さて、今日の我が国の教育において、「生きる力」の育成が重要な課題となっています。「生きる力」をつけるとは、すなわち、自分で課題を見つける力、自ら学び考える力、意欲を持って活動し、よりよく問題を解決できる力を育成することです。その「生きる力」の核となる豊かな人間性の育成を担う柱として、道德教育の充実が従来にも増して強く求められています。

平成27年7月、学習指導要領解説の一部改訂が行われました。「特別の教科 道德編」において、「道德科では、児童が日常の体験やその時の考え方や感じ方を生かして道德的価値の理解を深めたり、自己を見つめたりする指導の工夫をすることが大切」とされています。児童自身が受けた体験や児童が行った体験を道德教育に生かし、「いのち輝き、自他を『つなぐ』道德教育を目指して」というテーマで研究を行うことは、今日の教育的課題と深く関連づけられると考えます。

本研究では昨年度の反省（道德の授業では、資料から離れ「自分を振り返る過程」になると、うまく自分を見つめたり振り返ったりすることが苦手な児童が多い）を生かし、①各教科等や体験活動と道德をつなぐ工夫 ②体験活動を道德の授業につなぐ工夫 ③成長を実感できる道德の評価の工夫の3つの仮説を立て、検証していく実践的研究に取り組んで参りました。

しかし、これまで試行錯誤の中から研究の方向性や児童が道德的価値について主体的に考える手立てを模索してきたところではありますが、まだまだ十分ではありません。ここにまとめました論文につきましては、多くの気づきやご示唆をいただき、今後の本校研究の充実、指導方法等の工夫改善へつないでいきたいと考えております。ご指導よろしくお願い申し上げます。

目 次

I	研究の概要	P 1
1	研究主題について	
	(1) 研究主題	
	(2) 主題設定の理由	
	(3) 研究主題の捉え方	
2	研究の内容	P 2
	(1) 研究の仮説	
	(2) 研究の視点と内容	
	(3) 研究の組織	
	(4) 研究計画	
	(5) 研究の構想	
II	研究の実際	
1	仮説1【各教科等や体験活動と道徳をつなぐ工夫】に関する研究	P 5
	(1) 各教科等や体験活動と道徳を関連させた指導計画の充実	
	(2) 各教科等や体験活動と道徳の授業を関連させる工夫	
2	仮説2【体験活動を道徳の授業につなぐ工夫】に関する研究	P 7
	(1) 体験活動を道徳の授業につなぐ工夫～みふねっこの学習過程～	
	(2) 学習過程における工夫について	
	ア 導入の工夫～みとおす過程～	
	イ 展開の工夫～ふかめる・ねりあげる過程～	
	ウ 終末の工夫～つなぐ過程～	
	(3) 授業実践	
	ア 低学年の取組 第2学年「くまくんのたからもの」親切	
	イ 中学年の取組 第3学年「あの日のこと」尊敬・感謝	
	ウ 高学年の取組 第6学年「絶望の中で見つけた光」生命尊重	
	エ 特別支援学級の取組～ユニバーサルデザインの視点～	
3	仮説3【成長を実感できる道徳の評価の工夫】に関する研究	P 15
	(1) 道徳ノートの活用	
	(2) 児童の実態や成長を記録する評価	
	(3) 学習環境の整備	
	(4) 地域・家庭・学校をつなぐ取組	
III	研究の成果と課題	P 19
1	児童の実態から	
2	研究の仮説から	
	研究同人・参考文献	

I 研究の概要

1 研究主題について

(1) 研究主題

いのち輝き、自他を『つなぐ』道德教育を目指して ～体験活動を道德の授業に生かす取組～

(2) 主題設定の理由

ア 教育の今日的課題から

児童が住む御船地域は「熊本地震」によって、大きな被害を受けた地域である。家が倒壊し住めなくなってしまった児童、ライフラインが断たれ不便な避難所生活を送っている児童、地震の体験ゆえに夜眠ることに恐怖心を抱えている児童など、一人一人が様々なストレスを抱えて登校してきている。その反面、心温まる出来事もあった。それは、震災直後、たくさんの人々が被災者のために行動してくださったことである。寝ずに避難所を切り盛りする役場の方、警察や消防署の方々... 全国から集まったボランティアの方々... 本当に多くの人たちが被災した人たちのために行動していた。そんな中、自ら進んで行動する児童を目にすることができた。水くみを手伝ったり、炊き出しの手伝いをしたり、自分にできることを始めていた。これらは、児童にとって貴重な体験活動ではないだろうか。

平成27年7月、学習指導要領解説の一部改訂を行い「特別の教科 道德編」においても、「道德科では、児童が日常の体験やそのときの考え方や感じ方を生かして道德的価値の理解を深めたり、自己を見つめたりする指導の工夫をすることが大切」としている。児童自身が受けた体験や児童が行った体験を道德教育に生かし「いのち輝き、自他を『つなぐ』道德教育を目指して」というテーマで研究を行うことは、教育の今日的課題と深く関連づけられるものである。

イ 学校の教育目標から

本校の教育目標は、「知・徳・体の調和のとれた心身ともにたくましい児童の育成～かしこく、やさしく、元気よく～」である。これらは、自ら学ぶという確かな学力の側面、自他の命を大切にするという豊かな人間性の側面、そして元気な心と体でやり抜くという健康・体力の側面、すなわち「生きる力」を育成する3つの要素と大きく重なるものと捉えることができる。研究主題が目指す「いのち輝き、自他を『つなぐ』道德教育」は、すべての教育活動の基盤となるものであり、本校教育目標の具現化へつながる。

ウ 本校の道德教育に関する実態から

本校の道德教育に関する実態や課題は、下記の通りである。

- ・地震を体験して、家族の繋がりや支え合いの大切さ、命の尊さ、自然現象の驚異等を肌で感じている。
- ・被災者を支援するためにたくさんの人たちが働いている様子を目の当たりにしている。
(消防署や消防団の人、警察官、町役場の人、復旧工事をする人たちなど)
- ・昨年度の道德の授業では、資料から離れ「自分を振り返る過程」になると、うまく自分を見つめたり振り返ったりすることが苦手な児童が多かった。

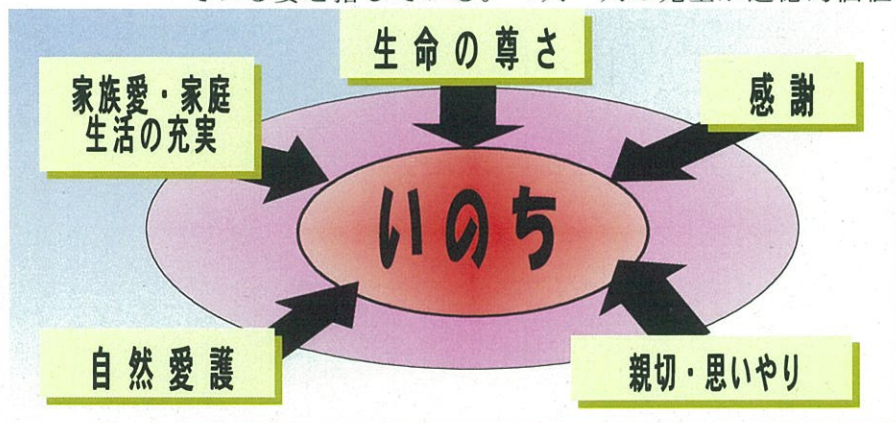
これらのことを踏まえ、本校児童の心のケアを一番に考えつつ、今、児童が体験した多くの出来事の道德的価値について補充や統合したり、より一層深めたりすること

が重要ではないかと考えた。震災に関する体験ばかりではなく、児童の様々な体験は、きっと自分自身を見つめ直し、道徳的な判断力や心情、実践意欲や態度を育てることへと発展できるだろう。

(3) 研究主題の捉え方

ア 「いのち輝く」について

いのちとは、「生命が生きていくための源となる力」である。生命尊重そのものが道徳性全体の基盤的な価値であり、全ての内容項目と関連があるといえる。全ての道徳性は「いのち」が大切にされてはじめて成り立つものだからである。本校では、児童が「いのち」の本質を多面的に見つめることができるよう、下記のように関連する価値項目を整理した。「いのち輝く」とは、児童一人一人が【資料1】に示す道徳的価値の大切さを理解し、人間として生きる喜びを感じながら、よりよく生きようとしている状態を指している。主体的に実践する児童とは、人が本来持っている、よりよく生きたいという願いやよりよい生き方を児童自らが求め、積極的に実践している姿を指している。一人一人の児童が道徳的価値を自覚し、自己の生き方につ



いて考えを深め、様々な場面、状況においても、道徳的価値を実現するために適切な行為を主体的に選択し、実践する児童の姿を目指している。

【資料1 「いのち輝く」につながる道徳的価値】

イ 自他を『つなぐ』道徳教育を目指して

自他を『つなぐ』とは、上記に示した「いのち」を輝かせるため、道徳教育を通して、自分と他者の「人・もの・こと」との関わりを意識した指導を指す。自分と人（友達・家族・地域の人等）、自分ともの（学校・地域の文化財・地域の芸術作品等）、自分とこと（学校行事・お祭り等）との関わりを意識することで、多様な体験活動を生かした授業が可能になる。そのことで、新学習指導要領に示された「児童が道徳的価値を自分との関わりで考えることができるような問題解決的な学習」を展開することができるだろう。